

別子鉾山端出場を探る 2

伊藤 玉男
山 川 静 雄

旧端出場駅・第四通洞と新端出場地形^{ちぎょう}

今回は端出場を撮った二枚の写真から何が判るかにトライしてみたい。

その前に、前回16号の反省として大島供清のことについて、もう少し立ち入った方がよかったと思うので、若干紙数を削いて補足しておく。

大島は別子鉾山近代化推進の上で無くてはならない人物であったが、端出場の開発とは特に関係があるまいと考えていた。しかし、端出場の開発は先ず鉄道を布設することからはじまったのだから、その鉄道建設をめぐってのドラマに大島は深く関わっていたらしい。さらにまた、大島の業績を追跡することによって、住友という巨大な商家が明治という時代（特に一〇～二〇年代）の中で、近代企業へ脱皮・変身していく一面を、ある程度窺

い知ることが出来るように思うのである。

大島は廣瀬宰平（以下宰平と記す）が明治四年に生野鉾山へ新政府の鉾山司となつて二度目の出司をしているときに知己を得たらしい。その後大島はずっと生野に詰めていたのかどうか分らないが、彼の専門の分野は測量であった。明治初期の測量技能は今日で云うところの先端技術で、だれもが出来るというものではなかった。ただ、殆どの測量師がそうであったように、彼も測量技能専門の教育を受けたものではなく、今日でいう「叩き上げ」だったようだから、一応工部省の官員であったが、身分は「工部省鉾山寮技術二等見習上級」――明治八年九月現在――というものであった。彼の出自は詳しくは分らないが、嘉永二年（一八四九）陸奥国岩手郡下厨村出身―住友史料館名簿―のようだ。彼は武士の家系であるが、役人として生野で勤めるようになったのが明治元年としても、まだ一九歳であったから、それほど高

い知識を備えていたとは思われない。恐らく彼の測量経験もそれ以降のことであろう。が、ともかく大島は幸平の眼鏡にかなって明治一一年二月に住友に雇用された。ときに二九歳、働き盛りの年齢であった。

入山当時の大島の身分は土木方(後の土木課)の測量係で、坑内はもとより牛車道開削の測量業務にも能力を発揮したらしい。それを認められて、その年の一二月には土木方長となり、更に二年後には別子重任局詰となり、一五年には理事に榮進するのである。

一方、別子鉱山では一三年に作成した起業案に従って近代化を推し進めようとした矢先、いわゆる松方デフレが波及することを予測してブレーキがかかった。それでも一五年には惣開に製鍊所を建設する計画が次第に具体化し、明治一六年一月にはフランス留学から帰った塩野門之助の指揮で建設工事に着手した。この時点での別子鉱山の土木課長(旧方長)は後に本店重任局理事になる谷勘治であるから、おそらく大島は別子鉱山全体を見る立場で塩野を扶けて製鍊所の建設を推し進めていたものと思われる。

ところが、惣開製鍊所建設に引き続いて明治一八年から山根製鍊所の建設がはじまるが、その僅かな間に別子

の山元では従来の和式に代る新しい熔鉱炉の建設案が持ち上がった。それは金矢民人なる技師が考案した金矢炉というものので、幸平は彼の進言を受け入れて施設の転換を図ったが、結局この方式は失敗に帰し、金矢は一九一二年二月に謹慎の後、解雇された。このときの責任問題は別子鉱山支配人廣瀬坦にも及んだ。彼は降格謹慎の処分を受けたが、そののみか、更に波及して大島供清もまた監督不行届で罰せられたのである。

この頃を境にして、幸平と大島は意志の疎通を欠くようになったらしい。が、お互いに別子鉱山の近代化の意欲は、立場こそ違え熱いものがあつたように見受けける。殊に輸送手段の改善、鉄道布設、別子銅山から鉱山への脱皮については共通する点が多々あつたように思われる。

幸平と大島の決定的な離反は、幸平が二年五月に米・欧へ向けて洋行する際に、大島が非常手段を使って同行しようとして以来のことだが、大島にしてみれば幸平はヨーロッパでは鉱山鉄道を視察して廻ることは間違いないことだし、しかし、幸平が視るよりも己自身が見聞することによって、別子の鉄道建設にはよりプラスになるという自負があつたに違いない。おそらく、彼の測量技術に加えて鉄道の知識が備われば、ある程度設計図は

大島自身が描いたであろう。

大島の話はこの辺りで止めるが、明治二〇年前後の別子鉱山は多難な局面のなかで、住友という商家から近代的企业へ脱皮するというこのために、良き意味で競いあつていたとも云えよう。ただ、大島供清は士族であつただけに、感覚的に住友家で育つた者とは、どこか相い入れない所があつたのだらう。明治二六年、大島は初代運輸課長に就任するが、翌年にはその職を拗(こ)つて幸平退陣の狼煙を揚げ、遂に幸平は現役を去ることになるのである。

さて、それでは先ず写真(1)を見ていただく。撮影された日付は判らないが、住友史料館報の「明治三十一年の別子鉱山写真帳と写真師光村利藻」に掲載されている風景(c20)とは違ふようだから、おそらくそれ以後のものであらう。この辺りは明治三二年の大風水害で被害を受けたが、電柱が多いことなどから、明治三五年五月に九〇kWの火力発電所が完成した以降のものとして話を進める。

写真説明は番号順にゆくことにするが、先ず写真撮影の位置は今の観光坑道の入り口の上の方らしい。



写真(1)

次に説明内容については、川上賢祐（本名喜一）の別子銅山追想録（原稿）に負うところが大きい。川上は明治三十七年別子銅山の小足谷で生まれ、父親は銅山の測量士であった。大正七年に住友鉱山別子鉱業所の別子病院に就職し、以来、薬剤師として鉱業所内の病院、診療所を転々とした。後津診療所に在勤中は村議会議員を勤めたこともあり、また囲碁の方では、関西棋院四段の腕前であった。二二頁にのぼる追想録は今では貴重な文献でもある。なお、長女福美氏は賢祐の没後、追想録を抜粋し、加えて別子銅山の古い写真と合わせて「思出の鉱山別子」―昭和五四年―を刊行されている。

①は中尾トンネル南口である。背後の尾根を今は中尾と呼んでいるが、川上は中尻と云い、トンネルも中尻トンネルと呼んでいる。追想録には遂に中尾という言葉は出こないが、それを筆者等は川上の記憶違いとは考えず、中尾の先端部分を指して中尻と呼んでいるのではないかと推測している。山の斜面はアカマツが主体の二次林で、地肌も表れている。現在は常緑広葉の森に遷移しているが、当時は薪炭材として伐採が反復されていたのであろう。

へ上げる諸物資の仕分けや荷造りで混雑していたものと思われる。

⑤は倉庫である。輸送の手順からしてこの倉庫には石ヶ山丈から降ろされたカマス詰の焼鉱（一部は生鉱が仮置されていて、橋の袂で分岐した引込線が倉庫の中まで延びていたので、鉱石はここで積み込まれていたのではあるまいか。

⑥は複式索道の端出場ホームの建屋である。索道の架設工事は随分難航したようだったが、凡そ一ヶ年かけて明治三四年一月に完成している。上部鉄道の方も難工事だったが、この複式索道の完成で作業が進捗した。ただ、複式索道の場合は、上げ荷に対して約四倍の重さの下げ荷がある。そのあたりは、どう工夫していたのか。

⑦は単式索道の建屋である。複式索道の方は主線（親線）が固定されていて、搬器（のちのバケット）はその主線に荷重し、引線（ひきせん）という一方の回転するワイヤロープによって上下する仕組になっているが、単式の方は搬器を吊り上げた主線そのものが回転する。双方の搬器には小さな転輪が装置されていて、複式の場合はそれが主線の上を移動し、単式の場合は上と下のホームにあるハンガーレールの上のみを移動する仕組みになっている。

②は芦谷川橋、通称の打除橋である。橋梁の名称としてはボウストリングトラスという横から見ると弓形の一風変わったトラス橋である。明治二十六年にドイツのハーコト社から輸入して組み立てた文化財クラスの珍しい鉄橋である。橋台は煉瓦積だが、更にその基礎は川石の石積で、目地はモルタルに似た膠泥という特殊な土で（俗にタタキと云う）固めている。

③は駅務舎である。川上は立川の庄屋の家を移築したものだと言いが、立川分店の事務所を移築したものだという説もある。立川分店は元禄末期以来、銅山と新居浜の中継基地とし、また、明治になってからは製銅所としての機能も果たしてきたが、新しい製銅所が惣開に完成したので、明治三四年一月に廃店となった。従って、その後に分店の建屋は解体されて各所に移築されたのであろうから、端出場の駅務室は立川分店の本館であった可能性が高い。大正六年に端出場の機能が向平の地に新しく造成された処へ遷つてからは、内部を改造して階下は別子病院端出場診療所とし、二階は採鉱課の応接室（一〇畳と六畳）と看護婦室（八畳）に当てたという。

④はプラットホームであろう。といっても、そこは荷役場で、上げ荷・下げ荷が山積みされていて、石ヶ山丈

従って、単式の場合はロープに回転を与える動力を必要とするのである。建屋の中にはその起動設備があつて然るべきなのに、この単索の場合は起動の電動モータを上石ヶ山丈駅に設置していた。従って、この建屋の中にはテンションシープという直径二mほどもある大きな車輪が地上すれすれの低い所で回転していたはずである。なお、単式索道は明治三十一年一月二〇日より稼働をはじめた。

⑧はよく分からないが、屋根が長い換気装置のついた構造になっているので、蒸気タービンによる八〇馬力発電装置室ではあるまいか。

⑨も発電機関連であるが、こちらの方は電力の一層の需用に因って明治三五年五月から運転をはじめた90KWの発電装置が稼働していたものと思われる。以上、二つの発電機を合わせると出力が一五〇kWほどになるが、蒸気の発生源となるものは石炭なのかコークスなのか分からない。手前に立っている避雷針の付いた円い煙突は外径の平均が五〇cmほどしかないから、どうも煉瓦造りではなさそうだ。もしそれがヒューム管のようなコンクリート製だったとしたらコークスを使った可能性の方が高い。この発電所でつくられた電気は新居浜の惣開製錬所ま

で送電され、動力や電灯にも使用された。いわば別子鉦山の発電所第一号で、住友共同電力(株)はこの端出場から発生したと云ってもよい。

⑩は建物の配置からして倉庫のようにも見え、手前の切妻の壁はどうも白壁で、さらに窓のマークが見えるから、倉庫兼運輸課端出場分課だったかも知れない。

その裏⑪の白っぽいものは何であろうか。端出場停車場平面図では倉庫になっているが、一見、芦谷川の左岸に蛇籠を竪に並べているようにも見える。しかし、その辺りはオーバーハングの断崖だから、護岸の必要のない処だし、それに当時はまだ蛇籠などはなかった。ただよく見ると、何となく屋根の形にも似ているから、あるいは板葺きか杉皮葺きの倉庫かも知れないが、それにしても凸凹がひどすぎる。そこで思いついたのが倉庫の屋根一面にカマスを並べて乾燥させているのではないだろうか云うことだ。

⑫は古くからの別子銅山道である。その左の方は自念坊という所で、今そこには煉瓦造りの旧水力発電所や変電所、その上に無住になった社宅がある。⑬の右の谷は吉ヶ谷で家屋が二軒写っている。川上によれば三戸あって、いずれも個人の持家で、その内一軒は星加鶴造

が、もう一軒は伊藤某が住んでいたという。

⑬にも上下二軒の家屋が写っている。下の家は茶店で岩崎某が営んでいた。上の方も個人住宅で、後に鉦山が買取して社宅にした。茶店の下に見えるのが銅山道で吉ヶ谷の二軒屋に通じていた。

在所のハテの溪谷が別子銅山近代化に当って索道の基点としての地の利を得たことによって明治二三年から開発がはじまり、三年後の明治二六年には立川分店に代る別子―新居浜の中間基地として大いに機能した。がしかし、そこが更に鉦山の基地として発展するにはあまりにも地形が狭隘だった。従って、一次の端出場時代は僅かに二〇年ほどで終わった。この写真の以後、端出場はどう変わっていったのか川上賢祐の文章を一部引用する。

端出場開発当時、打除の川底から坑口まで石垣を築き、吉ヶ谷から成美湖に至る間の地形を拡張し、其の上に採鉦山課事務所は坑口に最も近く、就業調所、飯場頭詰所、電車庫、共同浴場(野間さん)が並び、病院端出場で出張所、守衛見張所は鉄橋の袂にあった。郵便局、販売所、鍛冶屋、蒸気機鑪室等が並んでいた。調度課には末松健太郎、販売部には前田政雄、圧搾空

気機械室には近藤□一、其建物の間を汽車のレールと電車の軌道が同居していた。端出場大地形竣成後、旧建物は取払われ、農林課詰所及木材置場、採鉦課資材倉庫等が出来た。

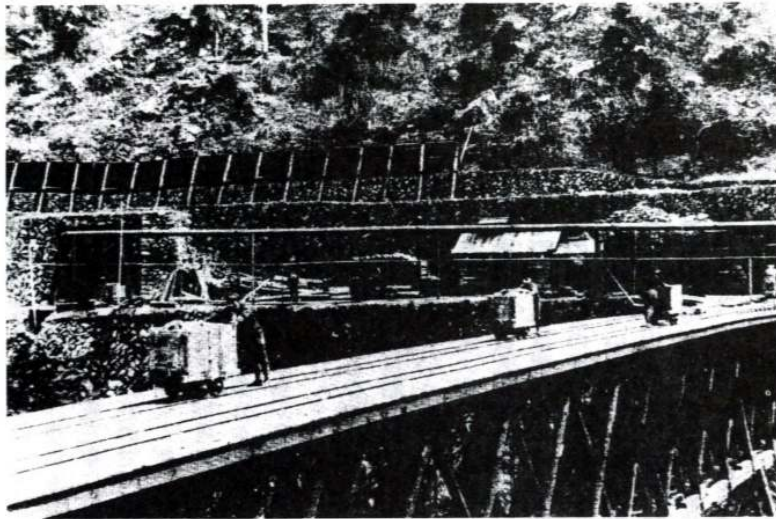
先にも述べた通り、川上は明治三十七年生まれであるから、彼の記憶の殆どは大正になってからであろうが、それにしても言い伝えも含めて、古い記憶を残されたものである。

次は写真(2)から何か読みとれるものはないだろうか。

撮影年次は不明だが、第四通洞開削着工後間もない写真のようだから、明治四三年から四四年にかけてのものだろう。写真全体の感じからしてどうも夏景色ではない。上段の落石防護柵の支柱や切替坑道横の小屋の屋根などは雪が積っているようにも見える。

撮影位置は、現在残っている鉄橋の左岸の元から、やや上流側へ寄った辺りからであろう。

左側の両面積の石垣に囲まれた坑口は明治四三年二月から開削がはじまった第四通洞口で、掘削断面はほぼ幅が四m、高さが三mぐらいであろう。坑口の支保はまだ丸太組の支替である。また右端にももう一つの坑口が写っ



写真(2)

ている。この坑道は第四通洞と斜交する形で伸びており、第四通洞より約六〇mぐらいの処で抜け合っていた。坑道断面は約2×2mぐらいと小さいので、多分出入りの鉱車のやりくりをするための切替坑道（排水兼用）だったのだろう。事実、写真では第四通洞からはズリを満載した鉱車が出で、手前の木製のトラス橋を渡ってズリを捨て、空になった鉱車は右の坑道を入ろうとしている。従って、この坑道は第四通洞開削以前に掘削された可能性が高い。何故ならば、写真の木製トラス橋は芦谷川にやや斜交して架せられ、その橋の袂が坑口になっているから、順序としては先ず橋が架られ、その後切替坑道の掘削がはじまったように思う。切替坑道を掘るなど一見無駄な工事に思えるが、手前芦谷川左岸の地形（鉱業用地造成）の準備を先行させないと、第四通洞の掘削がはじまると、順調にゆけば一日当り四〇㎡ものズリが搬出されることになるから、造成地即ちズリ捨場を先ず確保しておかねばならない。そのためには表面の石積は川石を使うとしても、裏込めの土は山土を掘ってモッコで担いで埋めてゆくなどより、坑道を掘って、そのズリで埋立てた方が何倍も効率的だし、地盤も山土よりはるかに安定する。そのような見地からすると、向平の地形は

大堅坑、第四通洞起業案が提起された時点で、もう既に下拵えがはじまっていたように思われる。更にもう一つの理由としては、この木製トラス橋が大正三年には腐朽がひどくて使用するに危険な状態になったので、ズリは端出場駅へ迂回し中尾トンネル経由で向平（第二期造成地）へ運ぶようになった。大正三年實際報告書。このトラス橋が四三年の第四通洞開削時に架せられたものなら、僅か四年で腐朽するはずはないから、架設は更に数年前に遡ると考えたいのである。

鉱車は多分前開きの箱トロというもので、一人一台の手押しである。鉱車の前の下の方には斜めになった止め金が写っているが、これが戸前金というもので、ズリ捨場まで行くとダルマというレールをスプーンのように曲げた仕掛があり、前輪がその窪みに入ると斜め前方に傾く、その時点でいち早く戸前金をはずすと、前蓋が開いてズリが捨てられる。この戸前金の操作は後の運搬夫のところで出来るように工夫されているのである。箱トロには規格などはなかったが、小鉱山では昭和三〇年代でもこの程度のものは使っていた。ズリを満載しても〇・三㎡ほどしか入らなかったから、通洞坑では一発破で約二〇㎡のズリがおきるから、鉱車は延べ六〇〜七〇台出

たり入ったりしていた勘定になる。第四通洞は掘削が七名、ズリ取りが一二名と瀬打ち（排水溝）一人の大体二〇名ぐらいの手組で二発破四交替という、いわば突貫工事であった。

次いで、図1の方も見ていただく。地図では第四通洞の右側に吉ヶ谷が流れていて橋が架かっている。それを渡った道は自念坊の上で元からの牛車道に合流している。これが新しく造られた牛車道で、写真1には写っていないのはどうしてだろう。写真1が明治三五年撮影（九〇kW発電設備完成時）として、新しい牛車道が出来たのが下部鉄道完成と同じ頃だとすると、当然写っていないなければならないのだが、その僅かな期間に樹木が成長して見えなくなったのだろうか。複式と単式の索道が架せられて大半の物品は索道によって運ばれたが、なかには索道では運べない長尺物や重量物があって、それらはお牛車に頼らねばならなかった。その上、明治三五年から東平開発起業がはじまり、そこまでの物資の運搬は端出場〜石ヶ山丈〜一本松〜東平と大きく迂回するルートであった。従って、三六年頃から上げ荷が急増したので、牛車道は再度頻繁に使われるようになった。だから、第四通洞前の高い石垣は牛車道のために築かれたという

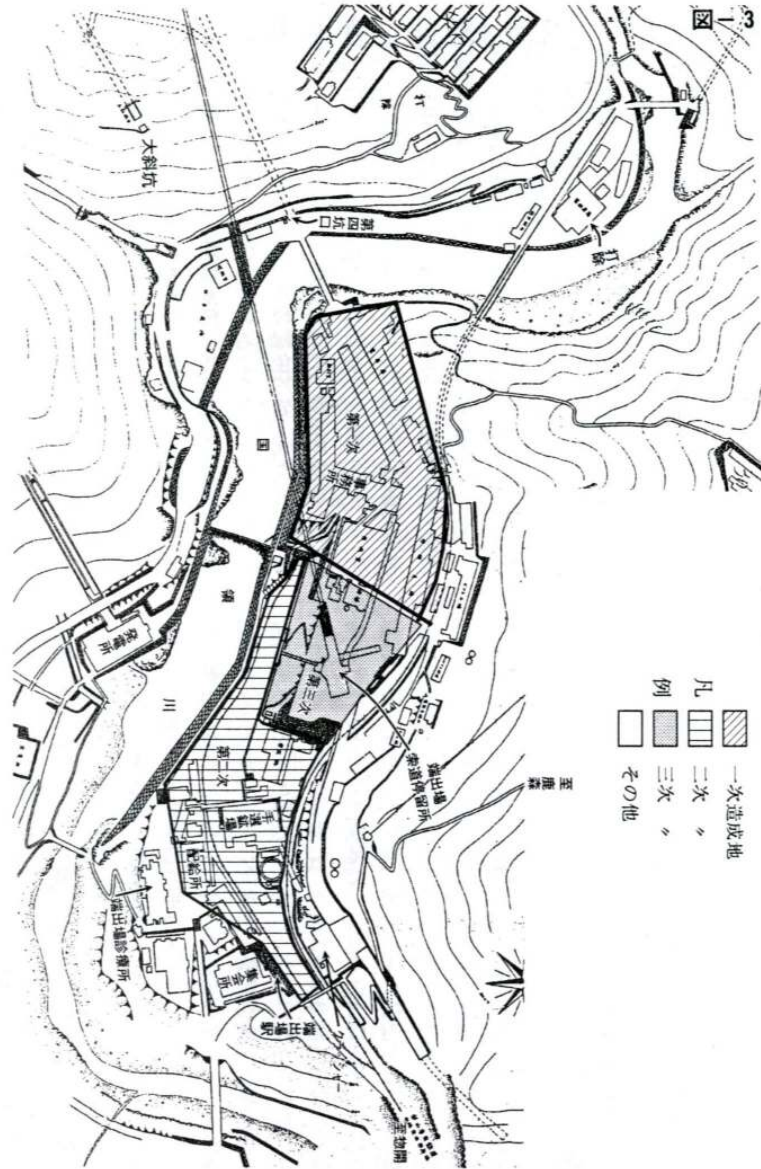
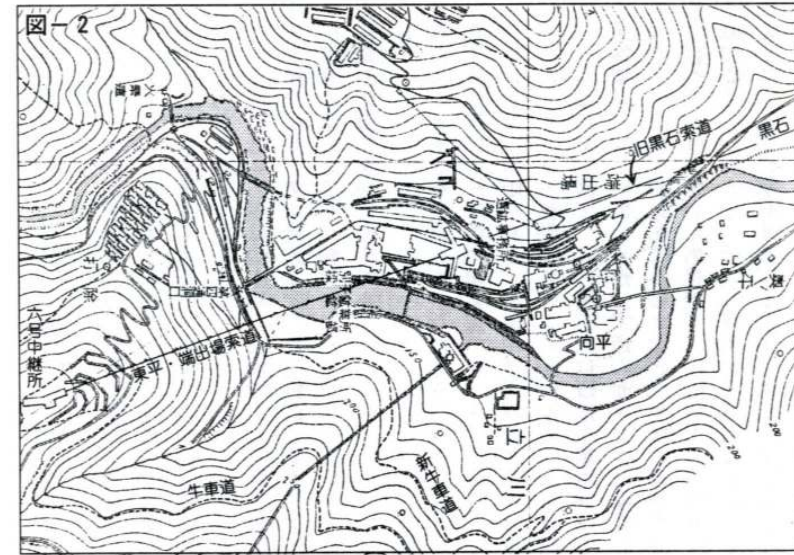
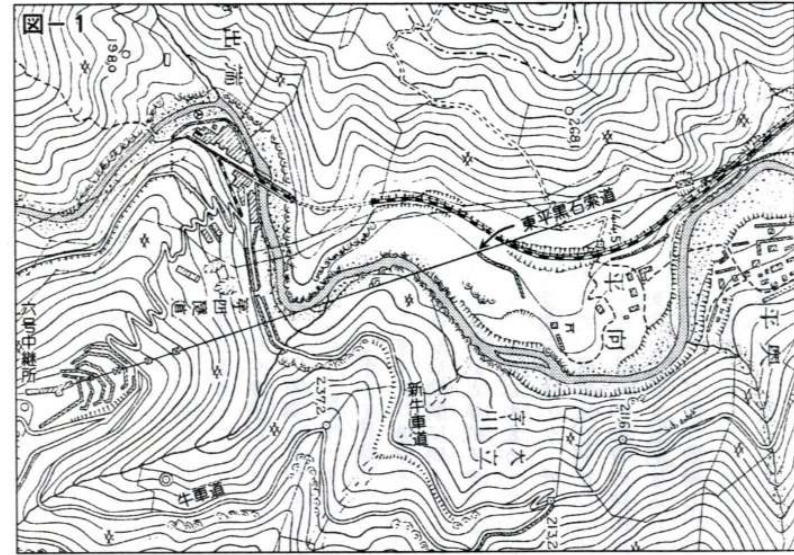
ことになるのである。

坑口のすぐ上の石垣は銅山道の法面である。往時は中持も含めて何百という人が行き交っていた道だが、第四通洞開削前にはもう少し下の方で、通洞レベル辺りを通っていたかも知れない。

更に上段の低い石垣は山止めの石積である。背後の斜面の崩積土はルーズで最近まで度たび斜面崩壊があった。この写真の頃にも落石が頻繁にあり、それで石垣の上に更に落石防護柵を施したのであろう。

最後に図1と図2を見比べていただく。

先ず鉄道線路と一印の東黒索道のセンターに注目していただければ一目瞭然だが、鉱業用地造成前と後では芦谷川の流芯が大きく移動しているのが分かる。図2は昭和二三年頃の航測図で、この時点では既に東黒索道はなく東端索道に変わっているが、索道のセンターには変わりはない。これを対比してみると大正元年頃には吉ヶ谷口で西へ出っ張っていた岩尾根が、その後大きく削り取られているのがわかる。そこに露出する岩石は蛇紋岩であるから、上手に採石すれば旧別子の東延の地形のよう



東平・端出場関連別子銅山略年表

編集局

年 号	西 暦	内 容
明治24年	1891	複式高架索道設置（端出場～石ヶ山丈：1,585m） 別子鉾山鉄道下部線【下部鉄道】着工
25年	1892	別子鉾山鉄道上部線【上部鉄道】着工
26年	1893	別子鉾山鉄道下部線竣工（惣開～端出場：10,461m） 別子鉾山鉄道上部線竣工（石ヶ山丈～角石原：5,532m）
27年	1894	第三通洞開さく開始
28年	1895	ペルトン水車設置（東平「辻坂」：第三通洞削岩機動力用） 東延斜坑竣工（東延～8番坑道準【第三通洞レベル】）
30年	1897	単式高架索道竣工（端出場～石ヶ山丈） 端出場火力発電所竣工（上記単式高架索道動力用）
31年	1898	単式高架索道（端出場～石ヶ山丈）運転開始 80馬力火力発電所設置
35年	1902	端出場火力発電所竣工（鉾山と惣開への電灯用電力供給用） 第三通洞貫通（東平坑口～東延斜坑底：1,785m）
37年	1904	落シ水力発電所設置
38年	1905	複式索道【東黒索道】設置（東平～黒石：3,575m） 第三通洞に電車導入 東平選鉾場設置 東平収銅所設置 鉾水路完成（第三通洞～東平～落シ～端出場～山根～新居浜） 住友病院東平出張所開設
39年	1906	私立住友東平尋常高等小学校開校 飯場制度改革着手
40年	1907	別子山中で暴動発生（東平の諸施設も破壊される）
41年	1908	東平郵便局開設（辻坂） 日浦通洞開さく開始
43年	1910	第四通洞開さく開始
44年	1911	日浦通洞貫通（東延斜坑底～日浦谷：2,120m） 別子鉾山鉄道上部線【上部鉄道】廃止（石ヶ山丈～角石原） 索道廃止（端出場～石ヶ山丈） 大立坑開さく開始
45年	1912	東平娯楽場設置 端出場水力発電所設置（鉾山全山電力供給用）

な格好な積石が採れる。事実、その対岸の石垣で基礎に当る部分には蛇紋岩が多いから、おそらく意図的に一石二鳥をねらったのであろう。

当初の予定では、護岸の石垣を詳細に調べるつもりであったが、台風等の事情もあって充分調査出来なかった。しかし、少なくとも石垣の基部に当る部分は岩質からして近くの川石を割って使っているようだ。その川石の岩質は多い順に列挙すると、点紋緑色片岩、角閃岩、紅簾石石英片岩、石英片岩、蛇紋岩等で、砂質片岩ないし泥質片岩は基部の方では見かけられなかった。

また、石垣の法面勾配は二分から三分ぐらいまでの急勾配であるから、その裏込めは山土ではなくて、全て第四通洞のズリで埋立てられたものであろう。

ついでに端出場地形（向平鉾業用地造成）にも触れて問題提起をしておきたい（図3）。

その造成起業は第四通洞開削以前に既にはじまっていたと考えるが、造成の順序は一次から三次までと、それ以降とに分けて行ったようである。

一次とは第四通洞地並の造成で、こちらは大正三年頃に完了していると見てよさそうだ。次いで二次の端出場手選鉾場と新端出場駅地並の大半は大正三年以降、同末

期までに造成されたものであろう。そこに昭和二年に端出場手選鉾場が完成し、第四通洞から出鉾された粗鉾はクラッシャーにかけられた後、ペルトンコンベアーによって手選鉾場に運ばれて鉾石と素石に分別されていた。選別された鉾石は下部鉄道で星越選鉾場に送られ、素石は順次新端出場駅と芦谷川の間に埋立用に捨てられて鉾業用地に造成され、そこに配給所・病院診療所・集会場・郵便局等が次々と建てられていった。これがその他に入る造成で、これとは別に、一次造成地の北に隣接して造成されたのが三次造成地で、こちらの方は大正八年に四通橋（第四通洞前の鉄橋）完成以降に坑内からズリを搬出して造成を行ったものと考えられ、その造成地に昭和一〇年五月に黒石索道を廃して東端索道端出場停留所が設けられた。従って、この時点で東平手選鉾場が廃止されることになったのである。

別子鉾山の採掘事業は常に一〇年以上先を見つめて展開されていたことが窺われるが、その背景にはキスラガーでは世界最大という大鉾床があったからであろう。

次回は打除・鹿森杜宅の発生を中心に端出場を探ってゆきたい。（つづく）

昭和32年	1956	太東索道廃止
33年	1958	東平生協発足
35年	1960	大斜坑開さく着手
36年	1961	別子学園（東平小学校・中学校）公立移管
43年	1968	東平坑休止（東平から撤退） 東端索道廃止 新居浜市立東平小学校・中学校廃校 新居浜市立東平小学校鹿森分校を新居浜市立角野小学校へ移管
44年	1969	大斜坑貫通（端出場坑外～32番坑道準：4,455m）
45年	1970	新居浜市立角野小学校鹿森分校廃校 端出場水力発電所発電停止
47年	1972	駕籠電車廃止（東平～第三通洞～日浦通洞～日浦）
48年	1973	別子銅山休山（事実上閉山）
52年	1977	別子鉱山鉄道【下部鉄道】廃止



大正 4 年	1915	大立坑貫通（8番坑道準～14番坑道準「第四通洞レベル」） 第四通洞貫通（端出場坑口～大立坑：4,373m） 大山積神社を目出度町から東平へ奉遷
5 年	1916	採鉱本部を東延から東平へ移転 鹿森社宅建築開始（翌年完成） 東平浮遊選鉱試験工場設置
6 年	1917	住友病院端出場出張所開設 私立住友惣開小学校鹿森分教場開校
8 年	1919	端出場仮手選鉱場設置
9 年	1920	東平粉選鉱設備（比重選鉱）設置
11年	1922	東平粒選鉱設備（比重選鉱）設置
12年	1923	全坑水を第四通洞から排水
14年	1925	東平改善会、端出場改善会発足 端出場手選鉱場建設着手
15年	1925	東平比重選鉱設備を新居浜選鉱場に移転
昭和 2 年	1927	端出場手選鉱場完成 東平と鹿森で最後の坑夫取立て式実施
3 年	1928	採鉱本部の東平地域内移動（第三部落から東平部落へ） 東平収銅所廃止 大山積神社を東平から川口新田へ奉遷
4 年	1929	社宅居住者転居完了（一本松・柳谷・唐谷→東平・鹿森・川口新田） 別子鉱山鉄道を専用鉄道から地方鉄道に変更
5 年	1930	東平選鉱場廃止 採鉱本部を東平から端出場へ移転
10年	1935	索道【東端索道】完成（東平～端出場） 索道【太東索道】完成（太平坑～東平） 東黒索道廃止 採鉱通洞開さく着手
13年	1938	駕籠電車運転開始（東平～第三通洞～日浦通洞～日浦）
16年	1941	鹿森分教場を東平小学校へ移管（惣開小学校公立移管のため）
18年	1943	採鉱通洞貫通（大立坑～筏津坑下部：約5,100m）
25年	1950	別子鉱山鉄道電化完成
30年	1955	別子鉱山鉄道を地方鉄道から専用鉄道に再変更 鹿森生協発足